

高齢者・障がい者の 外出を支援します

◇おでかけサポート事業（福祉送迎サービス事業）

- 送迎範囲 / 市内一円
- 送迎内容 / 医療機関への通院、買い物など生活に必要な外出
- 登録対象者
住民票があり、(ア) (イ) のいずれかに該当で①から④のすべてに該当する人
(ア) 介護保険要介護認定が要介護3以上
(イ) 18歳以上の方で身体障害者手帳（1級1種～4級1種）、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳のいずれかを所持している
- ①今年度「福祉タクシー券（バスカード）」の交付を受けていない
- ② 本人の市民税が非課税
- ③ 自動車運転免許証を所持していない
- ④ 施設に入所中、病院に入院中でない

☎ 障がい福祉課（春日庁舎内） ☎ 74 - 0222

◇高齢者外出支援事業

- 対象 / 市に住民票があり居住している70歳以上で、①から④のすべてに当てはまる人。
①自動車運転免許証を所持していないか自動車の運転をしない②特別養護老人ホームなどの施設に入所中、病院に入院中でない③市民税非課税世帯、または市民税課税世帯で本人が市民税非課税で、課税年金収入額と所得金額の合計額が80万円以下④おでかけサポート事業に登録していない
- 助成内容
①タクシー券かバスカード
A：要介護・要支援の認定者など
タクシー券1枚620円券を24枚分またはバスカードを年額16,360円
B：認定のない人
タクシー券1枚300円券を年間24枚分またはバスカードを7,920円

☎ 介護保険課（春日庁舎内） ☎ 74 - 0368



平成30年度予算を「脱皮への鼓動」予算と名づけました。

丹波市が大きく変わる、平成31年の前年であり、さまざまな準備に大わらわの年です。

平成31年度には、市内中心部に、県立柏原病院と柏原赤十字病院を統合した県立丹波医療センター（仮称）がオープン。市への注目度が高まり、人・モノの動きが活発になると見込まれます。このタイミングを逃さず「魅力にあふれた丹波市ならでは」の新しいまちづくりを進めたいと考えています。

また、医療センターのオープンで、市内の人口異動も予測されます。人口減少がより顕著になるエリアの「安全安心なコミュニティ」「市内中心部へのアクセスを容易にする公共交通網

市長コラム
丹波語り

平成30年度予算
脱皮への鼓動

丹波市長 谷口進一

の確保」など、較差は正が急務と考えています。将来を見据えたまちづくりを一緒に考えていきたいと思います。

一方で、30年前の「丹波の森宣言」（昭和63年9月）で高らかに謳われた、丹波地域らしい里山の暮らし、人々の営みを守り、継承することは今の時代に丹波地域に住む者の責務です。

脱皮に向けて、市民のみなさんが主体となって、丹波市の魅力をカタチにするシティプロモーション活動への補助制度を整えました。市民の方々一人ひとりが「ワクワク・ドキドキ」しながら手を携え、住みよいまちづくりに邁進できる、そんな一年になることを期待しています。

市内11法人与協定 要援護者の避難場所を確保

3月26日、市内11法人16施設と「災害時における避難場所等施設利用の協力に関する協定」を締結しました。

協定により、災害時に一般避難所での滞在が困難な、高齢者や障がい者などの「要援護者」の避難場所の確保ができました。谷口市長は「いつ起こるか分からない災害に対し、備えができた。大変心強い」と感謝を述べました。



協定の締結式に参加した各法人の代表ら

官民一体となって計画を推進 丹波市観光・商工業ユニティプランの答申を受けました

3月29日、丹波市地域資源活用懇話会から、観光・商工業振興施策のあるべき方向を示す「丹波市観光・商工業ユニティプラン（案）」の答申を受けました。

懇話会の田辺真人会長は「人口減少の負のスパイラルの解消と地方創生の実現に向け、官民一体で着実に計画を進めて欲しい」と伝えました。



答申書を手渡す、田辺真人会長（写真右）と谷口市長（写真左）

まちかととぴくす 川端皓孔さんと稲葉登志夫さんが受賞 丹波市かたくり賞



受賞した川端皓孔さん（写真右）と谷口市長（写真左）

3月27日、長年にわたり他の模範となる善行や多額の寄附により、市の発展に大きく寄与された人を対象としたかたくり賞が、川端皓孔さんと故稲葉登志夫さんの2人に贈呈されました。

川端さんは、父である故川端謹次画伯の油彩作品など212点を寄附。稲葉さんは、認定こども園の建設用地を寄附されたことから受賞されました。

市島地域今中地区 復旧した農地に栗を植樹



栗の植樹を行う地域の小学生たち

平成26年8月の丹波市豪雨災害で被災した今中地区の農地のほ場整備が完了し、栗園として整備するために植樹を行いました。

今中地区の農地は災害で大きな被害を受けました。災害で発生した土砂を受け入れ、ほ場整備方式で復旧。今後は栗園として整備が進められ、復興の新たなシンボルとなることが期待されています。